

2021年8月

課題本 『ある男』

平野啓一郎/著 文藝春秋 2018年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

この作品の発端に出てくる“小説家”の「私」は、話が始まる序で自分の事を明かした後、すーっと遠ざかってしまった。「私」は、作中人物である弁護士の「城戸さん」に、読者の目を引きつけておいて、自分は、城戸の背中を追う位置に退く。まるで NASA の司令室から、宇宙船の中を撮すスクリーンを城戸と一緒に眺めている様な感じだ。

地に足が着いていないふわふわした無重力空間で、地上と同じ生命活動をする宇宙飛行士達の姿勢をイメージしてしまった。「城戸さん」は、固定されない浮遊する登場者達をつなぎ止めようとする。

「私」が主人公と目した城戸は、あまりページが進まないうちに、事故死した谷口大祐という人物が別人だったという事件に巻き込まれる。まだ 300 ページも残って居る。早々と大筋らしいものが出てきてしまった。私の予想では、他人になりかわりながら、素知らぬ顔で暮らす無難な日常から話を起こして、次第に日常が非日常に変化していくのかと考えた。本を閉じてみると予想は外れたが、話の先を自分流に創作しておくのも楽しい。

謎解きに従っているうちに、戸籍売買による名前の変化に驚いたものの、その話だけではすまない内容を目論んでいると気が付いた。

城戸の職業が弁護士だから、様々な事件に立ち会っていてもおかしくなく、話を広げるのには便利な職業に設定したなあとと思う。所々に、別の裁判の進行も書きこんで一呼吸おかせるとにも都合がよい。

戸籍を変えてある人物になりかわるのだから、それを繰り返されると、途中で何回か混乱させられた。登場する全員が浮遊していたのでは収まりが付かないので、弁護士の城戸章良、依頼者の里枝(武本姓で生まれ結婚で米田になり再婚で谷口になり夫谷口の死亡で武本に)、城戸の妻香織、息子の颯太、谷口大祐の元恋人後藤美涼、大祐の兄谷口恭一、城戸の同僚、などが地面に打ち込まれた杭のように現実感がある。その杭と、漂っているような男達をつないでたぐり寄せる役割が、城戸を中心にして、後藤美涼、谷口恭一に背負わせている。

謎に隠されている出発点が、殺人罪の死刑囚小林謙吉の息子である小林 誠だ。彼は、小林から原になり、殺人者の息子だという「出自」から逃れたくて、更に田代昭蔵、曾根崎義彦と戸籍を交換、その後、曾根崎姓を変えて、谷口大祐になり伐採作業中の事故で亡くなった。戸籍交換を辿る謎解きは、それぞれの名前が持つ物語を書き集んで進む。小林 誠の物語は、書き起こせば別の作品になりそうだ。

「谷口大祐」は、宮崎県S市で武本里枝と結婚し3年9ヶ月を平穩に暮らした。

宇宙空間の浮遊感を連想させた謎は、現代人の読み手が、戸籍というものは確固とした1個人を特定するものだと経験上思い込んでいることから起きる。

以前読んだ『人類最年長』（島田雅彦作）で、159才まで同じ頭、同じ身体を何人にも使い回して上書きする人物の登場を思い出したが、今回の様な理由で戸籍交換があり得ることは、想像もしなかった。

そこで、改めて、この浮遊感を考えた。

自分を自分だと証明する物は何だろうか、と。運転免許証、戸籍謄本を取る。それはつまり、その戸籍の内容が、そのまま自分そのものを保証すると考えている。だが、敗戦の中で残留孤児となり大陸に残された子どもに、戸籍はどんな役に立っただろうか。

そして、戸籍があるばかりに、選んで生まれてきたわけでもない「出自」を問われ、自分の人生が破綻していく場合もある。400万年ほど遡れば、人類は誰も「出自」が一致する。たかが数百年の目の前だけの「出自」で自他を判断する人もあるが、それがなにになろう。

城戸が探し当てた小林 誠は、殺人犯の戸籍から離れるために、他人の戸籍を手に入れてなりすまし、他人の過去で自分の人生の上書きをするつものように何回も繰り返して「谷口大祐」に至っている。

戸籍によってその人を特定することは、国籍にも通じる。城戸弁護士は、在日朝鮮人の三世だと言うが、同時に国籍は日本人だとも言う。戦時中に朝鮮半島や侵攻した地で行われた皇民化政策も、日本の皇民として名前を押しつけた。今、日本は、戸籍簿によって個人を特定しているが、電子化が進み、世界が入り交じってグローバル社会になれば、「戸籍」や「家族」がどんな意味を持つか問題を投げかけて来る。

そんな観点に立てば、小林 誠は、穏やかにS市で林業に精を出す「谷口大祐」でよかったのではないかと思う。戸籍や名前が何であれ、いずれも仮に身につけているに過ぎない。共に暮らした里枝や悠人や花、それに彼を知る全ての人達の中にまいた彼の因は、「小林」という姓も「仮名」にして流れていく。残りの人生を生きる武本里枝が、「谷口大祐」と過ごした3年9ヶ月を幸福だったと思えるのなら、「仮名」(A MANとでも)であったとしても、そう思えたことを共に喜びたいと思う。「仮」を裁くのは、私では無い。

城戸弁護士と妻と後藤美涼、武本里枝との間。谷口大祐と兄恭一と後藤美涼との間。男女間の微妙な感情の揺れを示す物語がある。

城戸弁護士と息子颯太との間。武本里枝と夭折した次男を挟んで夫、長男との家族関係。それぞれの家族という塊が持つ葛藤。どの関係も、小説にはいくらでもありそうな波乱や凧の物語である。

〈とにかく、他人の人生を通じて、間接的になら、自分の人生に触れられるんだ。誰か心情を仮託する他人を求めている。〉

小説でも読んでいような調子で事の顛末を語りながら、小説の効用を語る夫妻の会話に“小説家”の「私」の口元を見るようで、ちょっと可笑しかった。

人は「仮」でなければ触れられない現実を抱えて生きているのかもしれない。

無重力では生きられない苦の地上を、小説は少しの間、宇宙空間にするのだろうか。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

読み終えて、表紙装丁の絵がずっしりと何か重くて不安なものを訴えているよう。

上に沢山の積木を抱え、土台は細く僅か上の何十分の一かの支えしか無い。

土台の一つでも傾くか外れると全てが崩れてしまう。人の生活の或る象徴的な形に見える。元通りになおすには、その傾きと外れた原因を知らなければならない。

里枝が新しく築いた家庭の幸せ、その再婚したやさしかった夫の死と、その夫が全くの別人であったことを知った衝撃。里枝の心と体がグラグラと崩れる音が聞こえて来そうな気がする。その夫が一体誰なのか知りたい里枝と、それにこたえようと奔走する在日3世である弁護士城戸。戸籍の売買や在日の問題、社会的弱者等色々な日本の中に流れ続けるテーマも考えさせられながら、あの男の過去を追求していく。

◆【 KT 】

○はじめの「他人の傷を生きることで自分自身を保っているんですよ」この城戸の言葉は重い。

○自分の過去を変えれば別人として生きていけるのか。人権問題、死刑制度、愛とは…
…。難しい問題がいっぱい。

○愛していた夫が別人だった。城戸の「探偵ごっこ」で本当の人物にたどりつく。

悠人の「……自分が父親にしてほしかったことを僕にしていたんだと思う……」優しい悠人にホロリ。良かった。

○ストーリーにひかれて一気に読めた。

○題名の「ある男」は誰なのかという皆さんの意見も興味深かった。

『ある男』を読んで

◆【 YA 】

何とも不安定な、今にも崩れ落ちそうな課題本のカバーページのブロックの積木、そして「ある男」……先行きが不透明でミステリアスな展開が連想された。昔のことでは無く現在にも社会的な問題として起こっていることだ。

次男を病気で亡くした里枝は夫と離婚し、(高校卒業以来)14年後に田舎の実家に戻る。そこで谷口大祐と名乗る男と結婚する。大祐の過去は決して幸せとは言えない辛い人生だったが、里枝にとっては、女の子「花」も生まれ、長男の悠人と4人で穏やかな幸せな日々を送っていた。僅か数年後、大祐は不慮の事故で死ぬ。連絡を受けた大祐の兄が「これは弟の大祐ではない」と断言する。大祐は全くの別人だったのだ。ここから色々な問題が取りあげられる。大祐と名乗ったある男の正体だ。

戸籍をとり換えて、他人の人生を生きるという事は一体何の目的なのか。その過去をも引き

ずって生きるのは何の為か。お互いが戸籍の取り替えを納得出来るのは、決して過去が順風満帆とは言えぬ辛い人生があったはず。

過去を変えてまで、戸籍を変えてまでも生きる為に、その選択をせざるを得ない男たちの姿が切ない。里枝は大祐と名乗った男が一体誰なのか、在日3世の弁護士城戸に依頼する。城戸も家族持ちだが、里枝の依頼にのめり込む夫に妻は迫る。他人の人生を追い捜し求める事で自分の人生を深く考えられると在日として生きる城戸の負目。弱さが伺える。在日の問題は今も解決していない。

城戸等の協力で大祐を名乗った男が判明する。「原誠」だ。城戸は彼の死後を追って取材し、誠の父親小林謙吉が殺人犯だったことを知る。殺人犯の息子として仕事も失い体も壊し、自分の過去を消したかったに違いない。殺人者は個人だが、家族、親戚にも及ぶという加害家族の問題も呈記している。誠にとって里枝との短い生活が何ものにも替難い至福の時だったのだろう。里枝にとっても母の性を継いで生きる原誠だった彼との生活は安らぎのはず。誠の存在と過去を追った城戸が、犯罪者の息子という立場と、自分の在日の立場で、誠をやさしい眼差を送るのに胸が熱くなった。

読書会で戸籍の話が出た時、吉川先生のお話があった。その中で先生が言われた仮名…けみょう…という言葉が印象に残った。仏語で実体のないものに仮に名づけているだけ、或いは名づけられているだけという何ともフワフワした宙に浮んでいるような言葉だが、反対に緊張してピンと固く張っているものが少し緩んでホッとする。人間の長い歴史の中でほんの一瞬を生きるだけの個人の生は戸籍で認めるものでは無く、その個人の生の中で培われたもので認めるということだろう。

戸籍は決して蔑ろにされるものではないし大切なものだが、戸籍そのものを頭に祀って置くだけのものではないのかも知れぬ。

戸籍は生活を送る上で便利なものではあるが、谷口大祐や原誠等に依る戸籍の交換を考えると、絶対的なものではないと言えるのかも。

不安定な積木のように、何かの拍子に一瞬で壊れるかも知れない人生である。

◆【 TK 】

『マチネの終わりに』を読んで、次にこの作品を読みました。共通点は社会問題に触れて、人間関係においては、後になってえっ！ そうなの?!と事実の違うのに気がついてます。そして、それでも人を愛せるという事でした。あるいは、愛せるだろうか?と問いかけているのかもしれない。

殺人者の血が流れているXは、他人の名前を持ち結婚して人生を歩んでいます。殺人者の血が流れて、愛されていない子供時代を経て人を愛せるのだろうか?と葛藤があったのでしょうか。でも里枝さんと結婚して幸せに暮らせる事によって自分は人を愛せて幸せになれたと言う事を証明出来ています。一緒に暮らした子供は、お父さんは父親からして欲しかった事を自分達にしてくれたと認めています。

人間は誰にでも罪をおかす傾向はありますが、罪を犯せば悪魔が喜び、人を愛せば神は喜ぶ。人間は神を喜ばせ、人を愛して幸せにできる事を証明したいものです。

私個人としては、名前を変えても、引っ越しをしても本質は変わらないのでいつも神に喜ばれる事に焦点合わせて生きていきたいと思っています。それでもなかなか罪の傾向は簡単には拭い去ることは難しいです。罪という言葉とか殺人者という言葉は極端かも知れませんが、確かに人間は常に罪とか悪と闘っているのが現実です。病気になるように常に闘っているのと同じです。

今迄の事は無かったことにしてやり直す事が出来れば別人としてXのように生きる必要は無かったでしょうが、人間は今迄の色んな事に折り合いをつけて生きていく事しかできないのが現実です。

神は心を見ておられいつも許しておられる事は人間にとっては救いです。

この小説を読んで人を愛して生きることができるといふ人間の証明を見た気がしました。

◆【 T 】

知らない場所に行き、誰も自分を知らない人の中で暮らしてみたい。過去を切り捨て0からスタートできたらどんな人生を送るだろう？と考えることがある。しかし、谷口大祐や原誠にとっての捨てたい過去とは単に現状に不満があるとか、現実逃避を考えているだけではなく、捨ててしまわないと生きることができないぐらいの厳しいものであり、生きるために過去を捨てたといえる。

しかし、他人と戸籍を交換し、名前を変え他人の過去の上に新しい人生を送ることは可能であろうか？自分の過去を無いものとすることはできるのだろうか？書類の上ではできても、人と関わろうとすると、どうしても本質があらわれる。その本質は、その人自身の過去が作り上げたものではないか？

原誠は、宮崎県で林業の仕事に就いた。そこで、里枝と出会い幸せな結婚生活を送った。彼は、温厚で独特な落ち着いた雰囲気があり精神的にも肉体的にも健康であったという。それは、彼が名乗っていた「谷口大祐」の本質ではなく「原誠」の本質であり、彼の死は、彼が交友を持った人たちに深く悲しまれ、誰一人として悪く言わないというのも「原誠」の本質であろう。たとえ名前は変わっても本質は変わらない。

彼は過去を偽り名前を偽っていたが、里枝や二人の子どもとの間の感情や行動には偽りはなかった。「原誠」の本質で彼女たちと生活していた。きっと、いつの日にか「原誠」として彼らから愛され、本名で呼び合う日が来ていただろうな思うと事故にあったことが残念であるが、里枝と二人の子どもの心の中には父親の「原誠」夫の「原誠」が存在し続けていると思う。

◆【 N2 】

サラッと読める面白い作品と思ったのですが、戸籍制度、皇民化政策、関東大震災、在日、死刑制度、戸籍交換仲介ブローカー等、いろいろな問題を含んでいて読み応えのある考えさせられる作品でした。

名前とは何なのか。戸籍とは何なのか。自分を取り巻く人々との関係とは何なのか。

序文のバーでの出会いからしてどこかミステリー小説を思わせるようでした。

最初は仮名を名乗っていた男が本名は城戸だと告げ、他人の傷を生きることで自分自身を保ち、嘘のおかげで正直になれると言う。見た印象や、面立ち、名前、職業、家庭環境から自身の本質とは関係なく、他人はその人を決定づけてしまうのだろうか。城戸と名乗るこの男も、本当に弁護士の城戸章良なのだろうか。

原誠はいつか殺人者の父と同じ過ちを犯してしまうのではという不安をかかえ、同じ血が流れている自分の身体が嫌でたまらない苦しさ、他人の偏見を抱えながら生きてきたのだが、谷口大祐の戸籍を手に入れたことで、嘘のおかげで、里枝との三年九ヶ月の幸せな暮らしを得たのである。

城戸自身も谷口大祐の名をかたり、「X」になりすまし一時の悦びを感じている。自分ではない者になってみたい気持ちは誰にでもあるのかもしれない。そしてそれが遊びであれば、秘密めかした楽しみでもあるだろう。しかし自分の咎でもないのに必然的に過去や置かれている環境に我慢できず、素性を知られることの恐怖などからどうしても他の者になりたいと切望する人がいるのも事実のようだ。

「X」の苦悩も当人には全く咎のない運命的なものであった。

城戸はある男「X」の正体を突き止めるために彼の人生にのめり込んでいくのだが、並行して自身の暮らしと立場を見つめ悩み解答を見いだそうとしている。「X」の背中を追っている城戸はルネ・マグリッドの作品『複製禁止』の不在の表象のように「X」の背中は見えるのだが実際の顔は見る事が出来ない。死んでもうこの世にいないからこそ、谷口大祐の正体を探すことで原誠の存在が浮き上がり気になってしまう。そしてそれが城戸の暮らしを見つめ直すきっかけとなる。

谷口大祐としての三年九ヶ月は原誠にとって一生に値する幸せだっただろう。愛に過去は必要なのだろうか。嘘のおかげで幸せな今があるのなら、過去が偽りであったとわかっても変わらずに愛し続けられるだろうか。原誠を慕う悠人は父親の苦悩と悲しみを理解することでさらに父親を愛し成長していくのだろう。

◆【 K子 】

平野作品は初読です。とても面白く読みました。推理小説は苦手な分野でしたが…

主人公(?)は自分の出自を消すために戸籍売買を繰り返し赤の他人として人生を閉じます。主人公(私の思う)は殺人者の息子となり人生が狂ってしまいます。彼の根底に流れていた「やさしさ」を持って人を愛することを知り、短い期間でしたが彼の人生の中で心穏やかな日々だったと思います。

タイトルの「ある男」は誰かという話題にもなりました。A MAN となっていたので一人・男は確かなことですが登場人物がすべて問題を含んでいる人達なので…

この作品に接し戸籍感について考えさせられました。先生から「仮名(けみょう)」—存在そのもの—本体と言う事を教えていただき、作者が読者に投げかけたものの深さに未だ理解が乏しいです。

◆【 F 】

こんな人生もあり得ただろう。今の自分の全てを捨てて逃げ出してしまいたい。日々何か追われるように生きてこれが本当に自分が求めている人生なんだろうか？後先なんて何も考えず電車で飛び乗って数日だけでいいから何もかも忘れて過ごしたい。

ほう思ってホームで待ちよるんじやが、ローカル線じゃどうにもならんねえ。ぜんぜん 電車が来んのよ。

待てども待てども電車が来なくてそうこうしてるうちに逃避したい情熱も冷めてしまい、定刻通りに発車する電車を見ないまま入場券分の 150 円を支払った自分は駅を後にして、すっかり遅れてしまった元の日常に帰っていくのであった。何も考えずに逃げ出さなかったのは救いであることに間違いない。1 時間に数本しか来ないダイヤに救われたと思うべきか、このように不便な環境こそ自分を拘束する退屈な人生という檻を構築している鉄格子なのか。

もし今の自分じゃない自分がいるとしたら一体どんな人生を歩んでいるんだろう？その好奇心を満たすために、今日は何となく休みの日だから自分に正直な自分を演じるべく駅にやって来た。でも諦めてラーメンでも食べて帰ることにするよ。喫茶とラーメンの店舗数が不思議と多いこの町で僕は明日こそ真面目に生きていくんだ。何者にもなれず、かといって誰かに憧れるわけでもなく、ただただ普通に明け暮れる。死ぬのが先かこんな毎日が自分だということを知りたくないことを知るその日まで。



[暗転]

[舞台中央 ストール×1]

[ネットでオラついでる風の男 板付]

自分らしく生きているって素敵じゃないですか、僕はぜんぜんそんなこと思わないんですけど。多くの人は自由に生きている風の人を見るとうらやましく思いますよね。まあ、羨むだけで変わるための努力はしないんですけど(じぶんのことやで)

今回の課題本、「ある男」ですけど、その。「ある女」になら出会ったことがあるんですよね。母子家庭に育ったけど親が嫌いで、地元に住続けたくなかったから、逃げるために結婚した人。離婚して今はシングルマザーだけど、楽しくやっている(ほんまの話)

自由に生きている風の人を見るとうらやましく思うかもしれない。でも、ほんとうの自由は自分で自分の死に方を決めて生きていることだと僕は思います。どんなに楽しそうでも皆それぞれ別の苦労がある、これ月並みな言い方ですけど実感がこもってます。だからもし、漠然とした自分の形に取り憑かれているなら何してるのか分からないかど本当に楽しそうに生きてる人に会うことも大事だと思います(できれば一緒に生活したらええねん)

楽しく生きるために苦労をあえて引き受けて自分のものにしてているのかもしれない。そんな生き方、価値観は理解できなかったの、それなら自分は楽しそうに生きなくてもいいやと思うようになった。そして自分が楽しめる生き方を探す方向に人生を転換してしまった、これが私が人生を本当の意味でドロップアウトし損った理由ですね(誰に向けて言ってるねん)

[※()内はNでお願いします]

[N原稿、別添付しています！]



上ふたつは、創作。1つは物語風の文字で読まれることを意識したもので、もう一つは台本風に自分が演じることを意識して、実際原稿を真似て書いたもの。

人に見せられるクオリティではないだろうけど、今回の感想文を書くにあたって、自分が生きてきた中で感じていることを整理しておかないと感想を上手く形にできなかったの。

同年代にはプロとして活躍されてる方も多くいらっしゃる訳なので、こんなものは何にもならないのですが、自分1人にとっては形にしておく意味もあるような気がしないでもない。平野啓一郎のホームページをみて、今回の本が30代の悩める大人に向けたもの(という側面もある)ことを知り、自分の想いを形にしました。

八月課題本は最後まで読めなかった。いつもは今、読まなければ一生読まない！と張り切って飛ばし飛ばしにでも読み通すのだが。今回は平野啓一郎さんの書く文章が好きになったのでまた読むと思いきみ止めてしまった。

とりあえず皆様の感想を聞いて頭の中でその後の展開や受けた印象を補足して自分なりに感じたことをまとめよう、このような心算で読書会に参加した。

普段と違うやり方をすれば、読書会に参加することの効能を新たに発見できることを期待したりしながら。

展開のネタバレや読後に受けた印象を聞いて、自分の中での「ある男」という作品に対して抱いていた感情を整理されていった。

すごく失礼なことを書くことになるが…

作者の書く文章に惚れてファンになったのは初めてなのは確かだが、そう言いつつも、ミステリーの部分にはこれっぽっちも惹かれていなかったのかもしれない。オリンピックに対する気持ちが整理されていないことなどから自分の好奇心があまり読書に向いていなかったこととは関係なしに、そもそも、そこまで興味を抱かなかっただけなのかもしれないと思うようになった。

[以下、ネタバレを含みます。]

そもそもこの物語の発端は、自分の出自から逃れるために(戸籍偽装の)罪を犯すという矛盾を孕んでいる。

色んな生き方がある、それは選択して勝ち取ったものかもしれないし結果的にそうなっただけかもしれない、振り返って整理のつくことだと感じられていることもあれば、破滅的でやり直せないから生贄を求めようとしている気持ちもあるだろう。しかし何であれ、人間としての在り方、自分の生き方を考えるならば過去を遡って定義されるものではなく今の精神の中に見出すべきだと30に近づくにつれ思うようになった。

だからなのか、平野啓一郎さんが生み出した男について何かこう釈然としないものがある(それがために読み進められなかったなんてことはないだろう)。

そうだ！ 男に対して説教してやりたいのかもしれない。あるいはどこかのバーでお互いに知り合うことなく出会って話をしてみたいのだろう。そんな時は、ザ・プラターズのオンリー・ユーなんかがかかってたらいい。んで「ぜんぜん関係ないかもしれんけど、オンリーユーなんだよ！」とか酔って管を巻くんだ。

読書会の中で話せなかったが、そういえば「ある女」にあったことを思い出した。自分の境遇から逃れたいがために結婚して知らない土地での生活を始めた人。戸籍、非合法なものではなく、結婚によって姓が変わるという当たり前にあることでも、それが別人になりたいという気持ちを叶えてくれる手段になっている側面は、現実的に、確かに、あると思う。

気持ちの持ち用ではどうしようもできなくて、どこまでも形に囚われているのが人間なのかもしれない。そういう意味では、男の気持ちも分からなくもないか。かなり本格的に形から入るタイプだったのだろう。

すごく好きなシチュエーション。思わず情景に入り込みたくて缶ビールを開けて急いで半分飲み干してトマトジュースを注いで、飲みながら読んだバーのシーン。そういや自分も隠したい気持ちがあるわけではないが、名前を伝えずに常連として店主と親しくさせてもらってるラ

一メン屋があつたりする。そこではいくらお喋りをしていても現実に何かを一緒にする訳ではない、どこまでも店主と客の関係だから名前なんてなくてもいいのだ！

お互いの匿名性というのは別にバー(酒の場)にこだわる必要もないのかもしれない。この読書感想文でさえも私の名前は英語2文字の記号でしかない、SNSでは性別すらも偽って全くの他人を演じることだって可能だ。ただ嘘をつく時に、そこに私はどこまでいるのかを把握し続けていないと妄想に囚われるようになりかねない。



平野啓一郎の文体について、自分は「京大卒」で「芥川賞受賞作家」という肩書きの通り、頭のいい人の書く、勝手な想像だが目の前の世界を自分なりに言語化して生きようとしている人の書く文章だと感じた。

読書会では、先月の「渦」の作者と比較すると性差が明らかナリトイウヨウナ話が出た。仮に平安時代のように男女で使用する文字が異なっていたりすれば常識的に判断しやすいのだが、性差というものをそもそもあまり意識せずに過ごしているので、ぴんと来なかった。

だが、文章に性差がある(でる)というのは面白い視点だとも思った。それは読み手が一方的に定義するもの、つまり(想定される)作者の性別と目の前の文章を照らし合わせて〇〇らしいと判断するものなのか。実際にそのような男らしい文体や女らしい文体というものがあり経験によって見分けられるようになるのか。

またその場合、その男らしいあるいは女らしい文章を生み出した作者は、何に影響されているのだろう。身体(脳みそ)がそのように機能させている心が認める性なのか、置かれてる立場・社会的な役割が物事に対する視点に影響するのか。

そもそも私の思う私がどこまで性別に関連しているのかも人によって異なるだろう。また作家という働き方はどのように性に縛られるのだろうか？同じテーマでともに文才のある女性経営者と専業主婦に書かせたらどのような文章が生まれるのだろうか？などなど時間が経てば経つほど多くの疑問が生まれた。

◆【 MM 】

不思議な小説だった。複数のエピソードと異なる視点が合わさって感じたことのない面白さだった。一気に読んだ。

漢字を多く用いた表現で堅苦しいような感じもしたが先を知りたい欲がページをめくるとに大きくなって次第に気にならなくなった。

「ある男」とは誰なのか。弁護士の城戸・里枝の夫(原誠)・里枝の夫がなりすましていた谷口大祐という男・刑務所にいる戸籍を人に売りさばく男・・・ちょっとあげただけでもこれだけいる。それぞれが抱えている問題や秘密、それぞれを主にしての小説ができそうなほどではないか。これを一冊の小説にまとめた作者の力は大了なものだと思う。

ある男たちのそれぞれの話の中には自分の力ではどうしようもできない出自について書か

れていた。在日である城戸。大人になるまではそのことについて考える必要もなく成長してきたが、就職を考える頃には父から「就職差別もあるから何か国家資格を取った方がいい」と助言があったり、結婚した妻の親からあからさまではないが根底にある差別意識から出る発言に違和感を感じたり、妻自身が城戸に対して差別意識を持っているという事実も明らかになった。子供には同じ思いをさせたくない、という妻の発言は城戸を傷つけるには十分であつたろう。親が殺人犯だった原誠も自分の力ではどうしようもない生まれに悩んだ一人だ。彼はそこから離れ自分らしく生きるために他の人の人生を生きた。

これだけ大きく重いエピソードの中での救いは里枝の子どもたちだった。原誠との間に生まれた娘は無邪気で愛くるしく、先夫との子どもである悠人は思慮深く優しい。悠人は先夫よりも再婚した原誠になついていた。原誠が今まで自分が思っていた父ではない、でも父ではないと言ってもそれは名前だけが違っていたのであり父そのものには変わりない。そのことを受け入れ妹のこれからを思い守ろうとする。思わず泣いてしまった。

作者の平野啓一郎は以前『マチネの終わりに』を途中で挫折して以来だった。読書会が終わってからこの『マチネの終わりに』を毎日一章ずつ読んでいる。今が読む時期だったのだろう。毎日贅沢な楽しみの時間を味わっている。読書会の中では平野啓一郎のSNSが話題に上がった。それも見てみた。私は彼の書く小説が好きなのかもしれない。SNSは直接的で少し息苦しかった。また時期がくればリアルタイムで彼が綴るものの良さもわかるときが来るのかもしれない。